

自主シンポジウム 11

幼児の主体性が育ちやすい保育環境の構造

企画者・司会者・話題提供者 萩原元昭（江戸川大学） 話題提供者 井桁容子（東京家政大学ナースリー・ルーム） 島田安子（星陵台めぐみ幼稚園） 結城 恵（群馬大学） 指定討論者 柴崎正行（東京家政大学）

テーマ設定の主旨

「面と向かうと恐れが出て、大事なとき、ノーが言えない。」「買ってもらうためにはごねてみせながらでも待つ」など幼児の気になる行動が見られます。

これらの幼児の行動は、まわりの状況を的確に判断し、自らの自由意思で行動しようとする態度―主体性―と関連しているかもしれません。

今度の幼稚園教育要領の改訂の基本方針の中に「幼児の主体的行動が十分確保されるための幼児理解に基づく教師による計画的な環境構成や遊びへのかかわり…」と主体的な活動が重視されてきているのも、前述のような幼児の状況を反映しているのでしょう。

幼児が主体的に行動しやすいかどうかは環境の構成のあり方により左右されると考えられます。ここでいう主体的な行動とは「幼児なりに思いや願いを持ち続け、かかわっていく活動のこと」をさすとしたら、どのような環境が、そのような幼児の主体的活動を促すかについて明らかにする必要があります。

本シンポジウムでは、幼児の主体性や主体的活動をどのように捉えたらよいか。次に一人一人の個性の異なる幼児が主体性を育くむには、どのような環境構成を行ったらよいか、そのメタ理論はどのように構築したらよいか。実践に学ぶと共に、実際の保育環境構成のあり方について論議を深めていきたい。

話題提供者の提案要旨

井桁容子：これからの保育環境を考える

少子化対策の一環として駅前保育所の設置が積極的に勧められています。子どもたちの心身の育ちの歪みが深刻化している昨今、とりあえず子どもを入れる器を確保するという発想だけでは、人間としての基礎が作られる大切な乳幼児期を過ごす生活の場としては、あまりに不安が多い。歩きはじめの一歳の子どもたちを初めて園庭で裸足にしたときに、みるみる表情がほぐれ、どの子も動きが急に活発になり、まるで足の裏から全身に、何かが立ち上ぼっていくように、表情が輝きはじめました。土、草の上、マンホールの蓋の上など通り過ぎたところを再び戻って歩いてみたりして、その感触の違いに気づいて楽しんでいる様子は自然が子どもたちの五感に理屈抜きにダイレクトに響くもの

であることを痛感したひとコマでした。また、不機嫌に泣く乳児を抱いて戸外に出て風にそよぐ木々や草花を見せて語りかけるうちに、泣きやんで落ち着くという経験は幾度もあり、自然のもつ不思議な力を感じさせられます。また、小さな草の芽をそっと摘み取る、木をおもいきり揺するなど子どものエネルギーを幅広く許容してくれる自然のなかのこれらの体験を通して子どもたちの中に育まれるものは計り知れません。しかしそれらの環境を乳幼児がどうとらえていくかを決定するのは、安心して自己発揮できる穏やかな雰囲気とそれを保証する保育者の役割が大きい。乳幼児がはじめてのものに対するときには不安が強い、好奇心が勝るなど、その子らしさが最も良く見えるときでもあり、それらを見逃さず、その子なりのとらえかたを受け止めながら無理なく的確に関わっていけるかどうかはその後の興味に大きく影響します。私たち保育者の感性が問われるのでしょう。また、家庭の養育力の低下を考えたときに、保育者がゆとりを持って関わることでできる保育人数、乳幼児自身が無理なく把握できる仲間の数、つまりやすらぎのある家庭的雰囲気が保てる保育人数が重要ではないでしょうか。

島田安子：主体性を育てる保育のために

今の子どもたちが育つ中で、主体性を阻む要素は何か考えてみたい。

- ・何でも直ちに、自動販売機式に与えられる環境に慣れてしまっています。買ってもらうために、ねだる、作戦を練る、たまにはごねて見せながらでも待つ。我慢して、何とか要求を通す努力の機会がありません。
- ・何もしないでも、親がやってくれます。こぼしたり、汚したり、壊したりしながら上手になるまで時間をかけて試行錯誤する機会を、初めから与えられていません。
- ・顔を合わせない機械の通信に慣れ、面と向かうことに恐れが出て大事なときのノーが言えません。プツリとスイッチをオフにすることで傷つかずに回避する時代の流れがあります。
- ・ルール無視、きまぐれなものぐさ、自己中心が「主体的な生き方」と思ってしまう。三十年、時代の変化と共に幼児の変化を見続けたの